

目次

はじめに

委員名簿

I . 調査研究全体の枠組み

- 1 . 本調査研究全体の目的 1
- 2 . 調査研究の内容と計画の概要 1
- 3 . 分析対象地点の特性 1
- 4 . 今回分析対象とする特定事件 2

II . 調査研究の結果（1）

～事件発生現場の実査結果～

- 1 . 連続少女殺傷事件の概況 1
- 2 . 事件発生現場の概略的地理的状況 1
- 3 . 事件発生現場の精緻な状況
 - (1) 第1事件発生地点＝S子さん殺害事件現場 2
 - (2) 第2事件発生地点＝小学3年女児刺傷事件現場 4
- 4 . 事件との関連から見た空間構成の問題点
 - (1) 第1事件発生地点＝S子さん殺害事件現場の空間的問題点
 - ア . 通学路の幅員の狭さ 7
 - イ . 通学路片側の斜面による壁の形勢 8
 - ウ . 団地街での住棟の配置位置の無計画さ 9
 - エ . 通学路片側の団地植栽による壁の形成 10
 - オ . 団地街からの視線遮断壁面の形成 13
 - カ . 団地住棟による視線遮断壁面の形成 14

(2) 第2事件発生地点＝小学3年女児刺傷事件現場の

空間的問題点

ア. 定常的な人気の無さ	15
イ. 歩道の幅員の狭さ	16
ウ. 歩道片側の斜面による壁の形成	17
エ. 歩道片側の崖の形成	19
オ. 団地街での住棟の配置位置の無計画さ	20

(3) 第1及び第2事件発生地点及びその周辺地区に

共通しての空間的問題点

ア. 計画性なく交差する小街路の形成	21
イ. 無目的で無計画な小空地の存在	23

5. 調査研究の結果(1)のまとめ	24
-------------------	----

III. 調査研究の結果(2)

～事件発生に関する模型実験の結果～

1. 今回模型実験調査研究の目的と方法	
(1) 目的	26
(2) 方法及び被験者	26
2. 先行してなされた犯行現場の実査結果	27
3. 実験結果の1	27
4. 実験結果の2	
(1) 実験2-1	29
(2) 実験2-2	31
5. 調査研究の結果(2)のまとめ	32

III. 調査研究の結果(3)

～事件を基にした住民調査の結果～

1. 今回住民調査研究の目的と方法	
(1) 目的	34
(2) 方法及び調査対象者	34
2. 調査結果	
(1) 居住継続意識	34
(2) 今後も同じ様な事件が起ることの不安	36
(3) 事件後の不審事案への接触状況	37
(4) 今後、こうした事件を防止するため 求められる対策	39
(5) こうした事件を防止するため積極的に 参加する可能性	40
3. 調査研究の結果(3)のまとめ	41

IV . 結 語 ～全体の纏め～

1. 本調査研究の結果のまとめ	
(1) 目的	42
(2) 分析対象事件	42
(3) 結果の要約	
ア. 犯行現場の実査	42
イ. ミニ模型を使った犯行現場の実験	44
ウ. 住民・女子小学生を持つ主婦対象の意識調査	45
(4) 結果を踏まえての幾つかの提案	
ア. 本市街地空間の早急な根本的見直し	45
イ. 見直しの方策基準の提案	46
(5) 結果を踏まえての「安全な街作り・団地作り」の 設計基準への提案	47
6. 最後に	48

資料編

資料 1 ・ (酒鬼薔薇少年に関する検事調書)	1
資料 2 ・ (神戸 A 少年による事件の地域生態学的分析)	73
資料 3 ・ (事件に関する年表)	90

はじめに

1997（平成9）年5月24日。関西圏に位置し、その中枢管理都市の一つである神戸市須磨区で男子小学生が行方不明となり、やがて首を切り落とされて発見された。いわゆる神戸・酒鬼薔薇事件の発生である。

この事件が発生する以前に、同須磨区内で既に2件の少女襲撃事件が発生していた。その発生場所は、この首切りという残忍な事件と極めて近い距離にあった。

やがて、この一連の事件の犯人が中学3年の男子生徒であることが判明した。

マスコミを含め、多くの人々は驚愕した。

また、彼が首切り事件後にマスコミに送った手紙文の異常さや理解不可能なことが、多くの識者を困惑させた。

酒鬼薔薇は異常か。それとも正常か。

彼がこうした事件に走った背景にいかなる原因が存在したのか。

さまざまな解釈がなされ、論争が生じ、彼個人の人格的分析論争は未だに継続している。

本研究は、この酒鬼薔薇事件に対し、「犯罪防止」の視点からアプローチする。それも、巷間に行われている彼個人の人格論的精神分析論的アプローチではない。

なぜ、彼は、あの場所を犯行現場として選択したのか。あの事件を発生させやすい環境的条件が、あの場所には潜在的に埋め込まれていたのではないか。

こうした視点から見る限り、彼にあの犯行を容易に実行させたあの地域の空間的特性も、犯行遂行原因、

加害条件の一つとして挙げねばならない。

あの空間の何が、どの様に作用し、少年をして容易に犯行に踏切らせたのか。

決して直接的な原因ではないが、犯行現場が持つ「犯罪原因」としての性格が、あの空間を解析することによって浮かび上がる。

たとえば、これまでも、かつて埼玉県を中心として発生した宮崎事件など、数多くの事件が団地街を現場として発生してきた。そのたびに、団地の安全性を強化するための環境設計論的な検討がなされ、実際に団地街の安全確保策が展開されてきた。

今回も、都市計画や団地街の設計担当者は、この事件から真摯に学ばなければならないであろう。

様々な解説の仕方があるであろうが、この研究結果が、今後の環境設計を通しての犯罪防止策の確立大きな役割を果たすことは間違いない。

こうした調査研究を可能にしてくださいました（財）社会安全研究助成財団の方々、その調査研究を力強く支えてくださいました警察庁生活安全企画課の方々、そして各都道府県警察本部の方々に深く感謝申し上げます。

平成11年3月31日

安全で安心な街づくり研究会

代表 小 出 治

委員名簿

1. 委員会

委員長……東京大学 教授	小出 治
委員……(財)社会安全研究財団 専務理事	山下 力
委員……長岡造形大学 教授	平井邦彦
委員……(財)都市防災研究所 専務理事	栗村成彦
委員……(財)都市防災研究所 研究部長	重川希志依
委員……(財)都市防災研究所 主任研究員	樋村恭一
委員……日本女子大学 教授	清永賢二 *
委員……STEP II 研究所 主任研究員	清永奈穂 *

2. 事務局

- (1) 都市防災研究所
- (2) 日本女子大学・清永研究室
- (3) STEP II 研究所
 - ・ 近藤滋夫研究員
 - ・ 奥野純子研究員(日本女子大学大学院修士過程) *

* は執筆者。

Ⅰ 調査研究全体の枠組み

1. 本調査研究全体の目的

市街地空間を利用して犯行を実行する通り魔から守られた安全な団地空間の設計基準を作成するため、実際の犯行現場の空間的環境的特性の解析を行い、その特徴と問題点を抽出する。

この抽出された問題点を踏まえ、市街地環境のミニ模型を作成する。このミニ模型を使用し、(元)専門的盗犯に空間的環境的問題点を検討させ、最終的に、将来の安全な団地空間の設計基準を検討するためのビデオ教材作成のための基礎資料を作成する。

2. 調査研究の内容と計画の概要

通り魔事件の発生した団地を中心とする特定市街地(地区あるいは街区とも呼ぶ)を1ヵ所抽出する。以下、その市街地を中心に、以下の調査研究を実施する。

- ① その市街地での事件の発生過程を現地実査によって再現し、犯行過程の空間的環境的特性を調査研究する。
- ② 上記で抽出された空間的環境的特性を基にミニ模型を作成する。このミニ模型を(元)専門的盗犯に評定させ、上記の問題点の解決手法を求める。
- ③ 上記の特定市街地(地区)内に居住する住民を対象に面接調査を実施し、市街地環境が犯罪発生に及ぼした影響度等について、住民の側から明らかにする。

3. 分析対象地点の特性

1997(平成9)年、神戸市須磨区内のT団地を中心に3件の事件が発生した(後掲「資料1」及び「資料2」参照)。

最初に発生したのが同年3月16日。街路上での付近の小学校4年及び小学校3年の女子が、未成年者と思われる男性に擦れ違いざまに金づちと刃物で襲われ殺傷されるという連続少女殺傷事件が発生。犯人は未検挙。

同年5月24日、第3回目の犯行が発生。通称「タンク山」と呼ばれている給水塔のある山中にて、付近の男子小学6年生が首を切り落とされて殺害(後掲「資料3」参照)。後日、その首が付近の中学校正門前に挑戦状と共に置かれていた。

これら3件の事件の発生現場は、自転車で1周30～40分の円周の中に入るほどの空間内に位置している。

市街地特性としては、神戸市内の中心街から地下鉄で25分程度の距離にある山(丘)地を戦後開発した新興住宅街で、団地棟及び戸立ての2階建て住宅から構成されている。

たとえば、少女連続殺傷事件現場となった地点は団地、男子少年首切り現場となった地点は戸立て住宅が中心の市街地を形成している。

いずれの現場も緑が多く、自然環境的には恵まれた環境にある。

4. 今回分析対象とする特定事件

今回の調査研究では、上記の3例の事件の内、最初に発生した連続少女殺傷事件に焦点を当て分析検討を進めることとする。理由は、以下の4点による。

①事件としては、最後の男子少年首切り事件の方が、その猟奇性により社会的に大きな注目を浴びた。

しかし、本調査研究の目的とする「事件発生を容易ならしめた原因としての環境条件」の抽出分析という視点からするならば、最後の事件よりも最初の2つの連続少女殺傷事件の方が、より注目に値する。

②団地街の市街地街路で、多くの住民の目が普段に注がれていたと見られる。しかし、それでも、事件は生じた。その理由の解析が進められねばならない。

③少年の首切り事件の被害少年と面識関係にあつて連れ込み的に成された事件ではなく、連続殺傷事件は全く面識が無く通り魔的に擦れ違いに成された事件であり、発生現場に空間構成的に何らかの問題が存在することが十分にうかがえる。

④最終的に3件の事件となったが、最初の2件は連続的に成されたものであり、連続的に事件を引き起こすことが可能な条件が抽出されねばならない。この連続して容易に事件を可能にしたことが、最後の男子少年首切り事件へ加害少年を駆り立てたことは十分に予想される。そういう意味では、初期の事件を如何に効果的に食い止めるかが調査研究されねばならない。

以上の4つの理由から、特に最初の連続少女殺傷事件に焦点を当て、事件との関わりを環境面を中心に調査研究する。